

教会者をめざす人へ—大グレゴリウス『牧会規定』第 1 部⁽¹⁾—

菊 地 伸 二

グレゴリウスより、敬愛する聖なる兄弟である同僚司教のヨハネスへ

親愛なる兄弟よ、あなたはわたしが牧会的配慮という重荷から、身を隠して逃げようとしたことを、好意的に、しかもきわめて控えめに配慮しながらではあるが、非難している。この重荷がある人にとって軽いものであると思われぬように、この重圧についてわたしが考えていることを、この書物を書くことによって洗いざらい表現することにする。

この重圧を免れている人が軽率にも期待したり、また軽率に期待を抱いた人がそれを手に入れたりすることに恐れを抱くためである。

さてこの本は四つの議論に分かれており、読者の心に、いわば一歩ずつ、しっかりと順序正しく投げかけていく。事実、ことがらの順序に従えば、ある人がどのように指導職の頂点に到達すべきか、次にそこに正しく到達した人がどのように生きるべきか、さらによく生きている人がどのように教えるべきか、最後に正しく教える人が自らの弱さを日々どれほど省みながら認識すべきか、ということであり、これらのことは、謙遜のあまり接近を避けたり、生活が到達した職と矛盾したり、教えが生活を置き去りにしたり、傲慢さのあまり教えをほめそやしたりしないためにも、大いに熟慮すべきことなのである。

それゆえ、まず恐れによって欲求を制御すべきである。教育職は、それを求めない人によって引き受けられた後、その人の生活が推奨されるべきである。さらに、生きることによって示される教会者の善は、語ることによっても伝えられるべきである。最後に、各々の弱さを省みる際、申し分のないみ業を抑制し、隠れた裁判者の目の前で上昇しようと膨れ上がることによってこのことを消さないようすることがまだ残っている。

しかし学を積んでいないという点ではわたしと

ほとんど変わりなく、自らを評価できずに、自分が学ばなかったことを教えたがる非常に多くの人がある。このような人は教育職の重荷を軽く評価して、その重要性を無視することになるが、彼らは、この本の最初に非難されるべきである。学識がなく、向こう見ずな人は教えの頂点を手に入れようとして、自ら企てた向こう見ずな行為によって、わたしたちの語りの入り口へと押し返されることになるのである。

第 1 部

指導職の頂点にはどのように到達すべきであるか

第 1 章

学を積んでいない者は、あえて教育職に向かうべきではない

深い思索をもって学んでいないのであれば、どのような技芸 (ars) であれ、あえてそれを教えるべきではない。魂の指導というものは、技芸のなかの技芸であるから、牧会的指導が、学を積んでいない者によって行われるとすれば、それはきわめて軽率なことである。ところで、心 (cogitatio) の傷は、内臓の傷よりも隠れていることを知らない人はいない。それにもかかわらず、薬の効能を知らない人が身体の医者と見なされることは憚れるのに、霊的な教えをわきまえていない人が、自分が心の医者であることを公言することを決して恐れないということがよく起こるのである。

しかし、創造主なる神によってこの世のあらゆる頂きは、宗教を尊敬する方へと傾いており、聖なる教会の中には、指導という形によって名誉という栄光を得ようとする人が少なからずいる。

学者は、見られることを求め、他人を追い越すことを欲し、真理の証言にあるように、「彼らは、宴会では上席を、会合では上座を求めらる」(cf. マ

タ23.6～7⁽²⁾)のである。

彼らは、謙虚さが求められる教育職に、ただ傲慢な気持ちで達しているだけに、その分、自分たちが企てた牧会的配慮という職務を相応しい仕方で行うことができないのである。学ぶことと教えることが乖離すると、教育職において、言葉そのものが混乱をきたす。主は彼らに対して、預言者の言葉を通して次のように語る。「彼らは王を立てた。しかしそれはわたしから出たことではない。彼らは高官を立てた。しかしわたしは関知しない」(ホセ8.4)。

彼らは最高の支配者の意志によってではなく、自分たちで勝手に支配しているものであり、徳によって支えられることはなく、けっして神から呼ばれたのでもなく、自らの欲望によって燃えあがり、指導職の頂点に達するというよりも、むしろそれをわがものとする、と言った具合である。

しかしながら、内なる裁き主は、彼らを前に引き出し、無視する。というのは、彼は彼らを許して耐えるが、明らかに排斥という裁きによって無視するからである。したがって、奇跡を行った後に彼のもとへやってきた人びとに対して、彼は、「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」(ルカ13.27)と言うのである。

教会者としての未熟さは、真理の声によって非難されている。実際、預言者によって、「羊飼自身何もわかっていなかった」(イザ56.11)と言われている。さらに主は、「律法を守っている人びとがわたしを知らない」(エレ2.8)と言って拒否している。それゆえ、真理は、彼らによって知られていないことを嘆き、真理自らが真理を知らない人びとの地位は関知しない、と抗議する。

主に属するものを知らない人びとは主によって知られないからである。パウロが、「もしある人が知らないならば、その人は知られないであろう」(Iコリ14.38)と証言しているとおりである。

たしかに、教会者の未熟さがしばしば仕える者たちに罰を招くことがある。教会者の罪によって、知識の光を持っていないのは彼らであっても、その無知によって従う人びとは、厳しい裁きによって損害をこうむることになる。このことから、福音書において、真理自身によって「盲人が盲人の

導き役となれば、両方とも穴に落ちる」(マタ15.14)と語られているのである。

このことから、「詩編」の作者も、望んでいるわけではないが、預言者としての職務から、次のように告げている。「見ない彼らの眼は暗くなれ、また彼らの背中は常に曲がれ」(詩68.24)。

たしかに、最高の名誉の前面に置かれており、道を先導する職務を引き受ける人は眼なのである。また、彼らに従ってついていく人びとは背中と呼ばれる。それゆえ、前を進む人が知識の光を失うならば、従う人は明らかに罪の重荷を担うために、身体は曲がり、眼は暗く背中は曲がることになる。

第2章

思索を通して学んだことを、生活を通して遂行しないような人は指導職を担うべきではない

霊的な教えを巧みに探索しながら、知識によって洞察したことを、生活によって踏みにじっている人がいる。彼らは、実践によってではなく思索によって学んだことを、すぐに教えようとする。彼らは、言葉によって教えていることを振る舞いによって台無しにしている。このことから、牧者が深淵を突き進むと、それに従う群は、真逆さまに落ちることになる。実際、それゆえ、主は預言者を通して、牧者の軽蔑すべき知識に対して、嘆いて次のように言う。「あなたがたは、自分自身は非常に透明な水を飲むが、足で残りの水をかき混ぜる。足で踏みつけられたものをわたしの羊は食する。つまりあなたがたの足がかき混ぜたものを彼らは飲むのである」(エゼ34.18～19)

正しく理解している人びとは、真理から流れ出たものをすくうので、明らかにもっとも透明な水を飲む。しかしまさしくその水を足でかき混ぜることは、聖なる思索による研究を悪く生きることによって貶めることである。そして、それに仕える人びとが、彼らが耳にする言葉を追い求めずに、ただ目にする歪んだ範例のみを模倣するとき、彼らの足によってかき混ぜられた水を飲むことになる。彼らは言われたことには渴いているが、その業によって歪んでしまい、いわば泉がかき乱されたように、泥を飲むことになる。このことから、

「預言者は廃墟への毘である」(ホセ9.8)とも言われている。さらに、主は祭司について預言者を通して、「彼らはイスラエルの家を躓かせる不義なる者である」(エゼ44.12)と語っている。

聖なる肩書きや地位を持っていながら不道德に振る舞う者ほどに、教会の中で著しく害を与える者はいない。この過失ある者をあえて責める者はいない。そして罪ある者が地位に対する尊敬のために名誉を与えられると、その咎は極度に模範とまでなってしまう。他方、心で注意深く耳を傾けて、次の真理の言葉を考量するならば、それにふさわしくない人は誰であれ、そのような罪の重荷から逃れる。

すなわち、「わたしを信ずるこれらの小さな人の一人を躓かせる者にとっては、その者の首にひきうすをかけて、海の底に沈める方がよいであろう」(マタ18.6)。

たしかに、ひきうすによって、この世の労働の周期が表現されており、海の底によって、最後の断罪が意味されている。

それゆえ、聖性という外見をまとった者が、言葉であれ、生き方としての模範であれ、他の人びとを破壊したのであれば、地上的に振る舞われたこの世での行為がこの人を死へと追いやる方が、彼が聖なる職務によって他の人びとに罪を模倣させることよりもよい。

事実、ただひとりが落ちるならば、地獄の罰は、この人をより耐えられる仕方で罰するであろう。

第3章

指導職の重責について。逆境は軽んじられ、順境は恐れられるべきであること

これらのことを手短かに語ったのは、指導職の重責がどれほどのものであるかを示すためであり、その職に相応しくない人が軽率に聖なる指導職に敢えて就いて、頂点を極めたいという欲求により、破滅へと導かれることがないためである。実際、このことからヤコブは、愛情をもって禁じながら、「わたしの兄弟たち、多くの教師になろうとするな」(ヤコ3.1)と言っている。

それゆえ、人間と神の仲介者ご自身は、天上の霊的被造物の知識と理解を超えており、天上では

永遠の前から支配しておられるが、地上では王国を支配することを避けたのであり、たしかに次のように言われている。「イエスは、人びとが彼を捕まえ、王にしようとして近づいてきたことを知ったとき、ただ一人で再び山に逃げた」(ヨハ6.15)。

創造した人びとを支配するお方以外に、一体誰が人びとを罪なく支配することができるであろうか。彼は肉において現われ、受難によって私たちを贖っただけでなく、ご自分に従う者たちに模範を示しながら、交わりを通して教えたが、王になることは望まず、十字架の刑に向かって進んだ。彼は、すでに差し出されていた頂点という栄光を避け、恥辱的な死という罰を求めたが、それは、彼のメンバー(肢体)が、この世に好意をもつ人びとから逃げることを学び、この世の恐怖をまったく恐れず、真理のために逆境を愛し、順境に対して恐れおののくためであった。というのも、順境はしばしば思い上がりによって心を駄目にし、逆境は悲しみによって浄めるからである。また、順境では、魂は高ぶるが、逆境では、たとえ自らを高ぶろうとしても、投げ倒されるからである。また、順境では、人間は自らを忘れるが、逆境では、嫌々であったり強制されたりであったりによせよ、自らの記憶へと呼び起されるからである。また順境では、しばしば、以前の善い行為は減ってしまうが、逆境では、長い時期の罪さえも拭き取られるからである。

実際、一般に、心は逆境という学校で訓練を課せられる。しかし、もし、心が指導職という頂点に達するとすぐに、栄光の経験により傲慢になっていく。たとえば、サウルは、最初は自分が相応しくないと考えて逃げていたが、王国の支配権を握るとすぐ高慢になった。事実、人びとの前で賞賛されることを望み、公けに非難されることを欲せず、彼に王としての油を注いだ人自身を殺したのである。たとえば、ダビデは、ほとんど自分の行為は神の判断に適っていたが、圧迫の重荷が欠けるとすぐに、害を与えようとする高慢さが吹き出し、女性を求めることでは弱くならなかったが、一人の男の死に対しては非常に残酷に振る舞った。そして以前は愛情深く悪人を赦すことを知っていた彼は、後には善人の死ですら考え直すこともせずに根絶させることを学んだのである。

最初は、捕えられた迫害者を殺すことを望まなかったが、後になると疲れ果てた軍隊が失われるにもかかわらず、献身的な兵士をも殺したのである。明らかに、彼の罪責は、もし答がこの者を赦しへと撤回しないならば、その人を選ばれた者たちの集団からはるか遠くに取り去ることであろう。

第4章

一般に指導職に忙しくなると、精神の堅実さが分散するということ

指導職に関わりだすと、しばしば心は多くのことに裂かれ、精神が混乱して多くのことに分裂すると、自分は個々のことに相応しくないことに気づく。このことからある知者は用心深く次のように言って禁じている。「息子たちよ、多くのことがらに手を出すな」(シラ11. 10)。というも明らかに、精神がさまざまなことに分散していると、どんなことであれ、一つの行いに関わることに集中しなくなるからである。そして過度の気遣いによって外側へ引き出されると、内側に対する配慮への堅実さは空虚なものとなる。外的なものへの気配りで精神はかき乱され、ただ自らのことはおろそかになる。多くのことを考えることは心得ているが、自分のことはわからない。事実、外的なことに必要以上に巻き込まれると、旅そのものに夢中になり、どこへ向かうかを忘れてしまう。その結果、自らを探求する熱意から疎遠になり、それがこうむっている損失を考えず、それがどれほど誤っているかを無視するようになってしまう。

たとえばヒゼキヤは、自分のところにやってきた見知らぬ人に香料の宝物庫を示したとき、自分が罪を犯していると決して信じなかった。しかし、彼が法的に行ったと見なしたことについて、次世代の子孫の罰という形で裁き主の怒りを招いた。ときどき、多くのものが手元にあり、仕える者がそれを行うだけで賞賛する行いが可能なとき、魂は思索しながら自らを高くあげ、過度な行為によって外側に突撃しているわけではないが明らかに自らのうちに裁き主の怒りを呼び起こす。というのも裁く者も裁かれる者も内側にあるから。それゆえ、わたしたちが心で罪を犯すとき、わたしたちが自分たちの中で行ったことは人には隠れて

いるが、証人である裁き主に対して罪を犯したことになる。

また実際、バビロンの王が傲慢な言葉を語ったときには、傲慢さの故に罪人とはならなかった。たしかに、預言者の言葉によって、傲慢について黙っていたその前から、彼は非難の宣言を聞いたのである。彼が気分を害した全能の神を見い出して、その神を自分に仕えるすべての人に語ったその人は、すでになされた傲慢の罪責から免れたのである。しかしこの後、自分の権力の成功によって高ぶり、自分が偉大なことを行っていると喜び、最初は、自分がすべての人びとにまさっていると考え、その後も高ぶって、「これは偉大なバビロンではないのか、それをわたしは王国の家として、また、わたしの強さの確固さ、わたしの優美さの栄光として建てたのだ」(ダニ4. 27)と言ったのである。明らかに、その言葉は、隠れた傲慢さが火をつけたものであるが、神の怒りの罰を公けに招いたのである。

事実、厳格なる裁き主は、後で公けにしながらか非難することを、最初から目に見えない仕方で見ているのである。このことから、神はこの者を非理性的な生き物に向かわせ、人間の交わりから離し、野の野獣にくっつけることで、心を変えさせ、明らかに厳しく義なる裁きによって、自分が他の人びとに大いにまさっていると判断していたことを失わせたのである。

したがって、こうした事例を持ち出すとき、わたしたちは、権力を非難するのではなく、欲望から離れて心の弱さを強くするのであり、そうすることで、指導職の頂点を不完全な人があえて奪い取らないようにし、平地で立ってもよろめく人が崖っぷちに足を運ばないようにするのである。

第5章

指導職において徳行の模範によって役立つことができるのに、自らの静けさを求めてそこから逃避する人について

実際、その人は徳の非常に高い贈り物を受けており、他人を励ますために大なる賜物によって高められており、貞潔さの熱意によって潔く、慎みという堅固さによって固く、知恵というご馳走

でいっぱい、忍耐という気品さによって謙虚で、権威という力によって真っ直ぐで、敬虔という恵みで優しく、正義という厳しさによって厳格である。たしかに彼らが、指導職という頂点を引き受けるように求められたときに拒否したならば、彼らは、単に自分だけのためだけでなく、他人のためにも受け取った贈物そのものを奪うことになる。そして彼らが他人の益でなく、自分のことだけを考えるならば、彼らが自分のものとして持とうとしていたものそのものを奪われることになる。

ここから、真理は弟子たちに語る。「山の上にある町は、隠れることができない。また、灯を灯して升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」(マタ5. 14~15)。また、イエスはペトロに言う。「ヨハネの子、シモン、わたしを愛しているか」と。ペトロが、イエスが愛しているとつかさず答えたとき、次のようにイエスは語った。「もしわたしを愛しているならば、わたしの羊を飼いなさい」(ヨハ21. 15~17)。羊の世話をすることが愛の証しであるのだから。徳に豊かな人が神の群の世話を拒否するならば、最高の牧者を愛していないことは確かである。そこでパウロは次のように言うのである。「キリストがすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。彼はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」(II コリ5. 14~15)。

このことからモーセは次のように言った。「息子を得ずして死んだ兄弟の妻を、まだ生きている兄弟が娶り、子どもに兄弟の名前を付けるように」と。また、「もし彼が妻を受けることを拒否したら、女性はこの人の顔に唾をかけ、近親の者は彼から靴の片方を脱がせて、その家を裸足の家と呼ぶように」と(民25. 10)。

たしかに、復活の栄光の後に、「行って私の兄弟たちに言いなさい」(マタ28. 10)と言ったのは、死んだ人の兄弟である。というのは、息子を得ずして死んだ人は、自分の選んだ者たちの数を満たさなかったからである。まだ生きている兄弟が、

その人の妻を手に入れるように命じられたのは、聖なる教会への配慮が、この人をよく治めることのできる方に課せられることは相応しいからである。女性がそれを望まない人の顔に唾をかけるのは、自分が受け取った賜物によって、他人に役立つことを好まないその人が、その善によって聖なる教会によって非難され、いわばその顔に唾をかけるのである。片方の足から履物がとられ、裸足の家と呼ばれる。たしかに、「平和の福音を告げる準備を履物としなさい」(エフェ6. 15)と書かれているとおりでである。

それゆえ、わたしたちと同様に隣人を配慮するならば、両方の足を履物によって保護することになる。しかし自分の益を考え、隣人の益をないがしろにするならば、片方の足だけ履物が脱げていて醜くなる。したがって、すでに述べたように、大いなる賜物によって豊かである人で、自分の瞑想にのみ熱をあげ、隣人の益のために説教することから逃げ、静けさという秘密を愛して思索という退いたところを求める人がいる。その人について厳しく裁かれるとするならば、疑いなく、彼らが公けなるものに近づいて役立つことができるそのことに関して、である。

実際、隣人の役に立って輝く人が、他人の益よりも自分の私的なものを優先するのはどういう精神によるのだろうか。最高の父からお生まれになった独り子が、多くの人に役立つため、父の懐から現われ、私たち公けのところに赴いたというのに。

第6章

謙遜さによって指導職という重責を逃れている人が、神の命令に逆らわないならば、真に謙遜であること

自分はその人に較べると劣っていると見なし、その人より好まれることはないからという、ただただ謙遜さを理由に逃げている人がいる。たしかに、その人のような謙遜さは、もし、他の徳が伴い、有益な仕方であらうように命じられたときに頑なに拒まないならば、神の眼には真実なものとなる。

実際、上に立つべきである最高の方の命令を理

解していながら、上に立つことを拒絶するならば、真に謙遜であるとは言えない。反対に、それによって他人に役立つような賜物を備えられ、心では逃げようとしながらも、不本意にも従うべきであるときに、指導職という頂点を命じられたならば、神の秩序に服従し、頑固さという悪徳から離れるべきなのである。

第7章

時々、ある者は説教の職務を堂々と求め、またある者もそれに相応しいものとして強制されてその職務へと引きずりだされることがある

時々、ある者は説教の職務を堂々と求め、他方ある者もそれに相応しいものとして強制されながらその職務へと引きずりだされることがある。それは二人の預言者の場合を考えればわかることである。すなわち、そのうちの一方は、説教すべく派遣されるべく、自発的に自らを提供したが、もう一方は、それを引き受けることに恐れをもって異議を申し立てた。

たしかに、イザヤは、自らを派遣した主の問いかけに対して、自発的に自らを差し出しながら言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」(イザ6.8)と。

しかし、エレミヤは、派遣されたものの、派遣されないようにと謙遜に抵抗を示しながら、「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」(エレ1.6)と言った。注目していただきたい。双方からは外見的には異なった言葉が出てきたが、それらは異なった愛の泉から出てきたものではない。たしかに、愛に関する二つの教え、すなわち、神への愛と隣人への愛がある。

したがって、イザヤは、活動的な生活によって隣人に役立つと欲して説教の職務を求めたが、他方、エレミヤは、創造主への愛に熱心にしがみつくことを求めながらも、説教のために派遣されないように抗弁したのである。

それゆえ、片方が果敢に求めたものを、もう一方は果敢にも恐れたのである。すなわち、一方は、語ることによって沈黙の瞑想の益を失うことを、他方は、黙ることによって熱意ある活動の損失を

感じ取ったのである。

しかしながら、両方の場合において、次のことを細かく見ておくべきである。すなわち、異議を申し立てた者が、全面的に反抗したというわけではない、ということである。また、派遣されることを望んだ者は、それに先立って祭壇の炭火によって清められるのを見ていたのである。清められていない者は誰であれ、聖なる奉仕をあえて引き受けることがないためであり、上からの恵みによって選ばれた者が、謙遜を装いながら傲慢にも抗弁しないためである。

そこで、誰であれ、自分が清められようと認識することは非常に難しいために、説教の職務を避ける方がより無難なのである。しかし、すでに述べたように、その職務を引き受けるようにとの、上からの意志に気づいたときには、頑固に避けるべきではない。大群衆の先頭に立つことを望まず、しかし従ったモーセは、両方の驚くべき働きを満たしたのである。

実際、無数の民を何ら不安なく導くことを引き受けていたら、おそらくは、傲慢になったであろうし、さらに、神の命令に従うことを拒んだとしても傲慢になったであろう。

それゆえ、彼は両方の点で謙遜であり、両方の点で従順であった。彼は、自分自身を評価して民衆の先頭に立つことを望まなかったが、命じられるお方の力を予期しながら同意したのである。そういうわけで、こうしたことから、聖なる人は、たとえ神が命じて、民衆を導くことを引き受けるのを恐れているのであるから、自分の欲求によって他人に先んずることを恐れないならば、向こう見ずな人は、どれほどの罪科があるかを理解すべきである。

モーセは、主が促しても不安になった。弱い人は名誉への重荷を得ようとして喘ぎ求める。自分のもので十分に押しつぶされるような者が、自ら進んでつぶされるために他人の重荷を肩に乗せるのである。自分の行ったことを運ぶことができないのに、あえて持つものを増やそうとするのである。

第8章

先頭に立とうと欲して、使徒の言葉を典拠にしよ

うとして、自分の欲望のために用いようとかき集める人びとについて

時々、先頭に立とうと欲して、使徒の言葉を典拠にしようとして、自分の欲望のために用いようとかき集める人びとがいるが、それは次のような言葉である。「監督(司教)の職を求める人がいれば、その人はよい仕事を望んでいる」(Iテモ3.17)。しかし、使徒パウロは、その欲求を賞賛しつつ、その先でその賞賛したことを恐れて次のように加えている。「監督(司教)は非の打ちどころがなくてはなりません」(同3.2)と。

そしてその徳に欠かすことのできないことがらを次々と数え上げ、非の打ちどころがないことの内容を明らかにする。

そういうわけで、彼はその欲求には好意を持っているが、教えによって警告し、あたかも次のように明白に言っているかのようなのである。すなわち、「あなた方が求めているものをほめるが、最初に、あなた方が求めていることを学びなさい。それは、自分自身をよく吟味することを怠って、名誉の頂きでみんなから見られようと急ごうとすればするだけ、あなた方が非難されるべきことは醜くなるからである」と。

実際、指導の技術を持った偉大な人は、その欲求には好意をもってそれを駆り立てながら、警告によってそこから身を引き離し、自分の聴衆に、非の打ちどころがない頂上を描きながら、傲慢さから身を引き離し、求められている職をほめたたえながら、それに必要な生活へと身を置くのである。

しかしながら、上記の言葉は、民衆の先頭にある人が、殉教の拷問に際して、先頭になって導かれていくような時にこそ言われていることを注意すべきである。それゆえ、司教職を求めることは、もし、このことによってより重い罰に至ることが疑いないときには賞賛すべきものであった。そういうわけで、「司教の職を求める人がいれば、その人はよい仕事を望んでいる」と言われるときに、まさしく司教職が「よい仕事」という表現で定義されるのである。

したがって、よい仕事への奉仕ではなく、名誉への栄光を求めているならば、その人は、司教職

を望んでいるわけではないから、その人は自分に抗する証人となる。たしかに、彼はただ単に聖職を愛さないばかりか、それを知らないからである。もし、指導職という頂点をあえぎ求めながら、かくれた心の瞑想において他人の従属を糧とし、自分への賞賛を喜び、名誉のために心を高ぶらせ、溢れんばかりのもので歓喜に満ちているならば、その人は聖職のことがわかっていないのである。それゆえ、この世の益は、その名誉という形で求められ、それによってこの世の益は崩されるはずのものであったが、精神が謙遜の頂上を傲慢さに引き寄せようと強いるとき、外的に欲求していることは、内的に変質していくのである。

第9章

先頭に立とうと欲している人の精神が、時として、よい仕事をする約束して身をのりだすということ

牧会職を引き受けようとする人で、時々いくつかのよい仕事を提案する人がいる。しかし、その人は傲慢さからそのことを求めてはいるものの、自分が偉大なことをしようと実際に探求する。そこで、内面における意図は押しやられ、探求する思索は表向きには別ものを示すことが起こる。

実際、精神自身が自分のことで自分に対して偽ることはしばしばであり、自らが愛していないよい仕事を愛しているふりをし、他方で、自らが愛しているこの世の栄光について愛していないふりをする。指導することを求めている、そのような精神は、それを探求している間はそれに向かうことを恐れているが、一度到達すると大胆になるものである。

というのもそれを求めているときには、到達しないのではないかと不安になるが、到達すると、突然、自分が到達したものは当然の成り行きであったと考えるからである。そして手にした最上位の職をこの世的に享受しはじめると、宗教的に考えていたことは何であれ、喜んで忘れてしまうのである。

思索したことが限度を超えて導かれると、精神の眼は、過去の行為に向けられるのは当然である。その人は仕えていたときに行ったことを考量

し、すぐにかつて提案したよきことを高位聖職者として行うことができるかどうかを知る。というのも、低い位にあったとき、高慢であることを欠いていなかったならば、決して、頂上において、謙遜を学ぶことはできないからである。賞賛が欠けているときに謙遜を求めているのならば、それがあまるときに逃げることはできないからである。

自分のものが、その人一人にとって十分でないときに、多くの人を支えていくことに向けられるとき、自分の貪欲さに打ち勝つことはできない。それゆえ、その人の過去の生き方から、各人は、自らを見出し、頂上を求めるときに、思索の幻想がその人を欺かないようにすべきである。

指導職に忙しくなると、しばしば、静かな時には保たれていたよき行為の実践が失われることがある。実際、海が静かなときには未経験の者でも正しく船の舵取りをしているが、嵐が来て波が荒れると、経験を積んだ船乗りでも混乱する。

実際、頂点の権力とは、精神の嵐以外の何ものであろうか。そこでは、心の船は絶えず思わくの嵐によって混乱し、絶え間なくあちらこちらへ駆り立てられ、言葉と行為の突然の行き過ぎ、いわば遭遇する岩で粉々となってしまうのである。

したがって、こうした中で、徳を豊かに持った者が強制されて指導職に向かい、徳を欠いた者が強制的に近づけないこと以外にその進路をとったり、保ったりすべきではないのである。もし、前者の人が全く拒否するならば、その人は、受け取った財産をハンカチの中にしまいこみ、それを隠したことで裁かれないように用心しなさい。たしかに、ハンカチの中に財産をしまい込むこと、それは受け取った贈物をゆったりとした怠惰の閑の下に隠すことである。

しかし反対に、指導職を求めている後者の人は、不正な行為の例によって、ファリサイ派の人のように、王国の入場に向かう人びとに対して、障害にならないように注意すべきである。ファリサイ派は、教師の言葉によれば、自分たちが入らないばかりか、他人をも入ることを許さないからである。また、彼は、上位の職に選ばれ、人びとの問題を引き受ける際には、いわば医者が病人に近づくようにすることを考えるべきである。

それゆえ、彼が行為するときに、苦しみが生じているならば、顔に傷のある人が、苦しんでいる人を癒そうと急ぐのは何とも僭越なことではないだろうか。

第10章

人は如何にして指導職に到達すべきか

したがって、その人は、まさしく生き方の模範として引っ張っていけるような人でなくてはならない。すなわち、あらゆる肉の情念を殺し、霊的に生き、この世の繁栄を軽視し、逆境におびえず、ただ内的なものを求める人でなくてはならない。

その人は、そのような思いによく合致し、身体がその弱さによって、また、霊がその抵抗によって矛盾してはいないのであり、他の欲すべきことによって引っ張られることはなく、自分のものを豊かに与えるのである。敬虔な懐からすぐに赦すことへと向かい、しかし、その赦しは相応しいものであって、正しさの高みから決して傾くことはないのである。不法なるものを求めず、他人によって求められたものを自分のことのように嘆く。心に抱く愛情から他人の弱さに共感し、隣人の善には自分の前進のように喜ぶ。自分が行うすべてのことにおいて他人の模範となるようにし、自分たちの間では、少なくとも過去のことについて赤面することがないようにする。

彼は生きることに熱心で、隣人の乾いた心を溢れる教えによって濡らす。彼は、祈りの実践と経験によって主に祈ることは手にすることができることを学び、その結果の声としてとくに彼には「今やあなたが語るとき、わたしはここにいます」と言われているかのようなのである。

実際、誰かがやってきて、自分に対して怒っている力のある人の間に仲裁に入るようにとわたしたちを導こうとしたら、わたしたちはその人について知らないので、その仲裁に入ることはできないと答えるであろう。

それゆえ、人は、その人についてはあえて仲裁者と決してならないような人のことで恥をかくとするならば、どうして、その人の生活の徳によって、神がその人の味方をするかどうか知らないのに、人びとのために神と仲裁の場をとることがで

きようか。あるいは、その人に対して、神の宥めがあるかどうか知らない人が他人のために赦しを請うのはどうしてか。

こうして、より不安で恐るべき別のことは、怒りを宥められると信じている人自身が、自分の罪によってその怒りに値するのではないかということである。

実際、気に入らない人が仲裁に送られたら、怒っている人の魂は刺激され、よりひどいものとなることは全く明らかでわかっていることだからである。それゆえ、今も地上の欲求に縛られている人は、栄光の場所を喜ぶ限り、厳格な裁き主の怒りをより深刻に刺激し、服従する者にとって廢墟の作者とならないように用心しなくてはならない。

第11章

人は如何にして指導職に到達すべきでないか

それゆえ、人は自分を賢く評価し、指導職の立場を進んで引き受けないようにすべきである。悪徳がその人のうちで、まだ罰するような仕方では支配しているのに、自分の罪で歪められている人が他人の罪科のための仲介に入ろうとすることがないためである。

このことから天からの声によってモーセは次のように言われている。「アロンに告げなさい。あなたの子孫のうちで、障害のある者は、代々にわたって、主なる神に食物をささげる務めをしてはならないし、その祭壇に近づいたりしてはならない」と。そこですぐに次のように加えられている。「目の見えない者、足の不自由な者、鼻が小さかったり大きかったり曲がったりしている者、足や手が折れた者、こぶのある者、目がただれている者、目の中にかすみがある者、絶えず疥癬のある者、身体にできものをもつ者、ヘルニアの者」(レビ21. 17~21)。

「目の見えない者」とは、上からの瞑想の光を知らない人である。彼は、この世の闇で押しつぶされ、来るべき光を愛することなく見ないので、自らの行為の足取りがどこへ向かうべきかを知らない。このことから女預言者ハンナは言う。「主の聖なる者たちの足を主は守り、不敬虔な者は闇で黙するだろう」(サム上2. 9)。

「足の不自由な者」とは、どこへ進むべきかは見ているが、精神の弱さによって、自分が見ている生命の道を完全に保つことができず、不安定な習慣のために徳の状態に至るまで力づけられることはなく、その行いの足取りが、欲求の向かう方向を従えるほど力を発揮していないのである。そこでパウロは次のように言う。「萎えた手と弱くなった膝をまっすぐにしなさい。また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろ癒されるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい」(ヘブ12. 12~13)。

「鼻が小さい人」とは、識別の尺度をもつことが相応しくない人である。じっさい、わたしたちは、臭いと悪臭を鼻で識別するからである。それゆえ、鼻という言葉で、それによって徳を選び、悪を非難する識別力がまさしく表現されている。そのことから花嫁の賞賛においてこう言われる。「鼻はレバノンの塔」(雅7. 5)と。というのは、聖なる教会は、個々の原因からどれほどの誘惑が生ずるかを識別によって見、高みから来るべき悪徳の戦いを探し当てるから、鈍感であると評価されることを望まないために、しばしば探求の際に、必要以上に行い、過敏になりすぎて誤る人がいる。このことから、これに「鼻が大きかったり、曲がったりしている人」とある。大きく、曲がった鼻とは、じっさい、識別する際に、適度に繊細でないということである。過度に行い、自らの行為の正しさを歪めている。

「足や手が折れた者」とは、神の道を歩き続けることがまったくできず、根本からよい行いの分け前に預からず、それは、少なくとも困難ではあるがよい行いを守っている不自由な者とは違い、それらの行いとは全く無縁な者のことである。

「こぶのある者」とは、地上の心配の重荷がその人を押しつぶし、上のものを見ることはなく、もっとも低いところで踏みにじられているものだけに注意している者である。

たとえ、天上の祖国の善について何かを聞いても、歪んだ習慣の重みのために重荷を負わされ、心の顔をあげられない。というのも地上の心配の習慣のために、彼は体が曲がってしまい、思索の状態を上にあげられない。こうした類の人について、詩編の作者は語る。「わたしは身をかがめ、

深くうなだれている」(詩38.7)。

彼らの罪科は真理自身によって次のように非難される。「そして茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである」(ルカ8.14)。

「目がただれている者」とは、真理を認識するための資質は輝いているが、肉的な働きのために曇らされている人である。ただれた目の瞳は健全であるが、液体が流れ出て、瞼は弱く厚くなっている。くりかえし流れることによってぼろぼろになり、瞳のまなざしが悪化する。肉の生活の働きがその人の感覚を傷つけてしまい、正しいものを精妙に見ることはできるが、歪んだ行為の習慣によって闇に包まれる。したがって、目がただれている人は、その感覚はもともと鋭いが、生活習慣の歪みによって混乱する。彼に対しては天使を通して次のように言われる。「見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい」(黙3.18)と。

見えるようになるために、目に薬を塗るのは、真なる光の輝きを認識するために、よい行いという薬によって、私たちの知性の視力を手助けすることである。

「目の中にかすみがある者」とは、真理の光を見ることを許されていないが、それは、知恵あるいは正義の傲慢さによって目が見えなくなっているからである。

じっさい、目の瞳が黒いときには見えるが、かすんでいるときは何も見えない。人間の思索の感覚が、もし自分が愚かであり、罪人であると理解しているならば、内的な光の知識をつかむ。しかし、正義または知恵の輝きを自らに帰するならば、自分は上なる認識の光から除外される。そして傲慢を通して自らを高めることによって、真実の光の輝きに決して入らない。それらの人たちについて、「自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり…」(ロマ1.22)とされている通りである。

「絶えず疥癬のある者」とは、その人の中で絶えず肉のみだらさが支配している人である。じっさい、疥癬において、内臓の熱は皮へと伝わり、まさしくそのことによって節制のなさが意味される。心の誘惑が働きへと突如として現れるとき、たしかに、内部の熱が皮の痒さにまで現れたこと

になる。そして外部でなお身体が傷つくのは、思索の中で快樂が抑えられなければ、行為においても支配的になるということである。ちょうど、パウロが皮のむずかゆさを取り除こうと配慮して次のように言っている。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです」(I コリ10.13)。

たしかに、試練を心で耐えることは人間的なことであり、試練の戦いと働きの中で打ち負かされることは悪魔的なことである。

「身体にできものをもつ者」とは、貪欲さによって心をうつろにされた人であり、小さいうちに根絶しないと、当然、度を超えて広がっていく。たしかに、できものは、苦痛なく身体を占有し、占有されたものの不快さを伴わずに広がり、肢体の美しさを醜くする。というのも、貪欲さもまた、とらえられたものの魂を、いわば喜ばせるようにして傷つけるからである。次々と獲得すべきという考えに服していると、敵に火をつけ、傷のうちに痛みを伴わず、燃えあがる魂に罪科から豊かさを約束する。しかし、肢体の美は失われる。というのは、他の徳の美がこのことによって奪われていくからである。そして身体全体は、全体の欠陥によって魂が投げ倒されたために、いわば荒々しくなり、パウロは証しながら次のように言う。「(金銭ではない)欲望は、すべての悪の根です」(I テモ6.10)と。

「ヘルニアの者」とは、行いによって醜さを行使することはないが、たえずこのことを考えるために、精神に度を超えて重くのしかかる。悪しき行為へと駆り立てられることはないが、肉欲という快樂によってその魂は何ら矛盾という棘もなく喜ぶのである。たしかに、ヘルニアの者は、内臓の液体が男性の性器にまで至り、それは醜さという厄介さを伴って膨れる。ヘルニアの者は、すべての思索によって放縱さが注ぎだし、醜さという重荷を心で耐え、歪んでいるが、行いによって行使することはないものの、そこから逃れることはない。

その人は、明らかによい行いの実践に向けて立ち上がることはない。醜い重荷が隠れたところであってその人に重くのしかかるからである。それゆえ、何であれこうした悪徳によって服している

人は、主にパンを提供することを禁じられている。今もなお自分の罪がその人を破壊しているのに、他人の罪を取り除くことができないのは明らかである。

以上、牧会職に、それに相応しい人が如何にして到達し、それに相応しくない人が如何に恐れるべきかを示したので、次にしかるべき仕方での職に到達した人が、どのように生きるべきかを示すことにしよう。

註

- (1) ここに訳されたものは、大グレゴリウスの『牧会規定』全体の序の部分及び第 1 部「指導職の頂点にはどのように到達すべきであるか」である。表題は、よりわかりやすくするために、「牧会者をめざす人へ」とした。

翻訳に際しては、Sources Chrétiennes 381, Grégoire Le Grand, *Règle Pastorale*を使用した。

- (2) 聖書の引用については、すべて引用後に () で記した。

Gregory the Great, *Pastoral Rules*, I

Kikuchi, Shinji*

ここに翻訳されたのは、ラテン四大教父の一人であり、6世紀から7世紀初頭にかけて活躍した大グレゴリウス（教皇グレゴリウス1世）が執筆した『牧会規定』全体の序の部分と第1部である。

第1部は、11の章から構成されており、そこでは、人を指導し、教える立場にある牧会者（聖職者）を目指そうとする人は、それ相応の学と経験を積んでいることが必要であるとともに、上に立ちたいという欲求に駆られて軽率に志すべきではないことが再三論じられている。

キーワード：魂の配慮, 指導職, 牧会的配慮